

その十五 美英子抄

「摩周湖が晴れました。出発！」

いい加減な天気予報に担がれて上町^{ウエマチ}さん、下村^{シモムラ}さんのウチら三人は摩周湖行の観光路線バスに乗る。摩周湖に行くにはこのバスしかあれへん。二人は中学からの親友やから一緒に座る。その後ろに同^{オナ}い歳ぐらいの女子の横が空いてたので同席させてもらった。

スラッとした、いかにも才女という感じで一人旅と言うだけあつて暗い。お互い大阪出身と分かってても会話は進まない。喋り好きのウチはおもしろいから勝手に想像する。

——失恋した心を癒やすために摩周湖に来たんや。ウチも大恋愛して、大失恋して、失意の旅に出たい……アホか、できるわけないやん。

名乗ることはなかったけど真っ赤なりユックの名札に「中原夏子」と書かれていた。緊張感満載の空気が伝わってくる。第一展望台の駐車場に到着すると一緒に降りる。

「帰りも同席していいですか？」

けど大人の返事。

「そうなればいいですね」

モデルのような後ろ姿にため息を漏らす。

——ウチもスレンダーやけど十センチ足らんし凹凸にも問題がある

彼女の容姿が頭にたたき込まれた。この間に周りの状況が一変して天気予報を裏切る霧が発生。近くにいたはずの上町さんらがおれへん。仕方ないから赤いリュックを追いかける。

その夏子さんは霧の中でも一目で男前と分かる——後で会う守君と顔を突き合わせていた。この男子はバスに乗ってへんかった。

——わざわざ摩周湖でデート？ あやしい

これが世にも不思議な物語の始まりやけど……。

お似合いのカップルやと思ったんは一瞬。まるで喧嘩しているような雰囲気。もちろん霧に紛れて近づく。霧に関係なく会話はハッキリ聞こえる。

「偶然、会ったことにして……納得させる」

「……気が……進まないわ」

「何のためにここまで来た！」

「大きな声を上げないで……」

「二世フタゴに未練があるのなら、縊よりを戻せばいい」

「やめて！ そんな言い方」

思わず夏子さんも大きな声を上げる。

「どれだけ話し合ったことか」

「何度言われても……分かりました」

こんなところでする会話やない。二人が離れるとウチは夏子さんというより赤いリュックを追いかける。絶対、何かが始まる。けど見失う。

——足の長さが違うんや

ますます霧が深まる。広くない展望台やのに人影を見つけて近づくけど知らん人ばかり。何とか下村さんを見つけた。そのちよい先で上町さんがさっきの超男前としゃべっている！

上町さんが守君モリキミを紹介してくれる。横にブ男がいた。ついさっき霧の中で守君と夏子さんの会話に登場した一風変わった「二世ニジド」という姓の男子や。何とこの二人は親友で一緒に旅行してる。

——何が始まるんやろか

改めて二人を見比べる。

——夏子さんがこのブ男から守君に鞍替えしたんは当然やなあ

守君、上町さん、下村さんは三人で盛り上がる。ウチも話の輪に入ろうとしたけどはじかれた。二世君もそうやから簡単にくつつく。夏子さん、守君との関連でブ男やけど何か憎めん二世君にも興味津々。けどアホな話をしてるうちに、上町さんらの声も姿も消えてしまう。近くにいるはずなのに。

ところどころいい！ ここで赤いリュックの夏子さんが再登場！ しかも赤いマークが印象

的な、いかにも高そうなカメラを二世君に手渡す。当然ウチの視力と聴力がパワーアップする。「シャッター、押していただけませんか？」

ウチはアホやけど霧の中でこんなセリフ、絶対言わへん。理知的に見えるけどアホや。せやからウチに気付いてうろたえる。夏子さんと守君のターゲットは二世君ことマモル。それにこのふたり、霧隠才蔵みたいに霧の中を自由に移動できるみたい。

「ごめんさい」

立ち去ろうとする夏子さんをマモルはボーッと見つめる。何と手にはカメラが残ってた！

——何してんの！ カメラ、くれるて言うてへんで

カメラを引ったくって霧に消えかけた赤いリュックを追いかける。

「中原さん！ 忘れ物！」

名指しされて振り向く彼女にカメラを押しつけると赤いリュックが霧の中へ消える。

——マモル、夏子さん、守君。この三人には想像を絶する深い因縁がある！

後で考えたらマモルがあのままカメラを持つていた方が面白いことになってたかもしれん。

さてマモルとウチが一緒にいたことは夏子さんと守君にとつて想定外。想定外が起こると計画が壊れる。上町さんと下村さんが偶然守君と遭遇したのが大本オオモトやけど強烈な想定外を積み上げたんはウチや。少なくともウチが二人にプレッシャーを掛けたんは間違いない。

夏子さんはマモルと遠い摩周湖で偶然会ったことにして、別れざるを得なかつた言い訳や守

君との付き合いを説明して霧に流す……違う、水に流す段取りやった……と想像する。

摩周湖第一展望台で、ほんのわずかな間に後々問題になる偶然が集中した。

守君とマモルのことを知りたくなるのは当然。マモルの誘いに乗じてみんなで知床に向かうことに。滝壺温泉も面白かったけどテント事件がウチの運命を変える引き金になった。

守君が風邪を引いたのでマモルの寝袋でテントの奥に、上町さんと下村さんが守君の二人用の寝袋で入口側に寝る事になった。この二つの寝袋の間でウチとマモルは着れるモンを全部着てウチが奥、マモルが入口側で一枚の毛布に包まったけどすぐウチのモンにした。寒くなかったけど二人の男子に囲まれてるから、なかなか寝付けなかった。

ところで守君がなぜ二人用の寝袋を用意してたんか。それは夏子さんと寝るため。ウチは滅茶苦茶残酷なシナリオを考えた。

——段取りがうまくいったら守君と夏子さんはマモルを観光路線バスに押し込み「バイバイ」して二人で北海道旅行を楽しむつもりやった！

我ながらマモルを可哀想に思った。せやからウチはマモルに抱かれた？ せやない！ 心じやなく身体を温めてやるために暖房器代わりに抱かれてやっただけ……なんやけど不覚にも深みにはまった。

*

もつと早くマモルと会えると思ってたけど意外と間が空いた。秘密を知った以上、二人だけ

で会うのが怖かった。もちろんウチの興味は衰える事はない。だから、上町さんが誘ってくれた神戸学生会館での受付のアルバイトにすぐ飛びついた。

ところでバスで一緒やったけどウチの顔は夏子さんの記憶に残らなかった。受付で夏子さんは関係者だけに配られる楽屋に出入りできる特別チケットを提示したけど、ウチには気付かなかった。

——なんでやる。ウチがブスやから？ それともあの時、記憶に残らんぐらい緊張してたんやるか？

ウチはモダンバレエで何度も舞台経験あるから楽屋の事、知ってるけど、神戸学生会館のそれは立派。楽屋は本番の打合わせや準備をする場所やから、トイレとかは別にして機密性はなし視線を遮るけれど声は丸聞こえ。銭湯に似ている。

「おーい。行くぞ」

「メイク中」

「急げ！ 本番が始まる」

「ごめん。トイレだけは行かせて」

こんな具合で話は丸聞こえ。楽屋とはそういうところ。

さて役者は三人。コンサート後半の主演守君。特別チケットで入館した夏子さん。まだ現れへんけどマモル。撮影のために必ず現れる。当然スパイ活動のチャンスを探う。

正面玄関のドアが開けっぱなしの受付は寒くて冷える。我慢できずに楽屋のトイレに駆け込む。気持ちよく用を足していると隣の着替室から夏子さんと守君の会話が聞こえてきた。ふたりの声を知ってるし陰謀も熟知している。涙声もあつて聞きとりにくかったけど大体こんな感じだった。

「なぜ今さら躊躇する？ 後戻りしたいのか」

「できるわけ、ないわ」

「摩周湖のようなやり方じゃなく、単刀直入に一、二分で切り上げるんだ」

「可哀想……いえ怖い」

「何回話し合ったら気が済む？ もう結論は出ている」

抵抗する割には夏子さんは素直に「はい」と返事した。

「もう一度確認する。二世は撮影前に必ず照明室で打合わせする」

「本当に照明室は真つ暗なの？」

「いい加減にしてくれ。チャンスは午前と午後の部の間しかない。打合わせが済んでスタッフが昼食休憩に出掛けたときや。二人だけになれば気が緩む。これも何度も説明したやないか」

夏子さんは頷いているはず。守君は執拗に念を押す。

「いいか？ 縊りを戻すような雰囲気距離を詰める。そうすれば二世は納得する」

「傷つけないようにと言うのは分かるけど……私、怖い……自信ない」

「自信の有り無しじゃない。本心だ。本当に縊りを戻す気持ちになってもいい。僕も覚悟している」

「だから踏み切れないの」

会話が途切れる。息づかいが聞こえた後、夏子さんが続ける。

「疑ってるの？ 言われたとおり、父に気付かれないように流産を装って中絶したわ」

——流産！ 中絶！

夏子さんはマモルの子を身籠もっていた！ しかも中絶！ ウチは大ショックを受ける。

「縊りを戻すなんてできないし、墮ろした私を許すはずないわ」

「許して欲しいのか」

——えーっ！ なんてことを言うんや！ 絶対許されへん！

夏子さんもショックを受けたはず。当然黙ったまま。

「二世は妊娠を知らない」

「……こんなところで言うのも……」

夏子さんは一旦言葉を切るが、すぐ意を決したように力を込めて続ける。

「親友を失うのよ。平気でいられるの？」

ウチが聞いた範囲内では恐らく初めて夏子さんが急所を突いた。即、守君が反応する。

「分かりきった事。ここでそんな事を言い出すなんて」

——この二人、普段、どんな会話をしてるんやろ？

沈黙が始まる。少し間を置いて守君が補強する。

「当然失いたくはない。でも夏子を選んだ。それがすべて」

夏子さんは黙ったまま。

「とにかく夏子次第」

「押しつけないで」

「押しつける？ いつも夏子の気持ちが一番に考えている」

「いつも押しつけてばかり。いつも言われたとおりしたわ」

すぐそれなりに反応する守君なのに黙ったまま。

「縊りを戻すわけがないのに何故身を引くって言うの？ 本当は……」

一旦止めるけどすぐ強い言葉を繰り出す。

「アナタこそ、春夜さんに未練が……」

悲鳴と鈍い音が！ 続いてドサツとモノが倒れたような音がした。守君が夏子さんを叩いた……いや殴り倒したに違いない。夏子さんの押し殺した嗚咽が聞こえてくる。

——春夜？ プログラムに載ってた守バンドのバイオリニスト、南野春夜のこと？ 守君とどんな関係があるんやろ？

足のしびれが限界に達する。そのとき反対側からドアの閉まる音がした。二人の会話も途絶

えた。

——助かった。けどクサイ

水を流すけど立たれへん。何とか隣の着替室に移って温もりが残るイスに座る。そして確信した。

——夏子さんは今もマモルを愛してる

足の痛みに関わらずウチの想像は無限大に広がる。

夏子さんと守君モリがどうやって知り合ったんかわからんけど、妊娠が関わっている事だけは間違いない。よー分からは守君が妊娠させた訳やないのに何故二人は引つ付いたんやろ。

守君はいつの間にか親友の恋人である夏子さんを絶対に自分のものにしたくなつた。それはプレイボーイの本能かも知れんし、夏子さんの魔力かも知れんし何故か守君から離れなくなつてしもうた。

妊娠事件がなければ夏子さんはマモルと、守君は春夜さんと人生を歩んだかも。そうなればマモルも守君も友情を継続して「万事、めでたしめでたし」になるけど、ウチはどうなるん！夏子さんがマモルに縊ヒキりを戻したら間隙をぬつて守君モリと結婚したいと考えた事もあつたけど、これはミーハーの感覚。今は守君に興醒めして夏子さんより春夜さんに興味を覚える。守君と夏子さん、結婚するんやろか。ハッキリ言えるのは、二人の会話には愛があらへん。

*

「中絶」「春夜」という二つの言葉がガンガン響く。

足を引きずりながら受付に戻る。まず滅多に使わない香水を全身に。イスに座ってスカートを上げて股や袋はぎを揉んでるとマモルがニヤニヤしながら現れた。慌ててスカートを下げて何食わぬ顔で近づく。

——何してたん！ 遅刻やんか

夏子さんと守君の陰謀を暴露しよかと悩むけど「中絶」という言葉に引つかかる。

——どんな反応するんやろ。思い切って……怖い！

なかなか割り切られへん。取りあえずおにぎりを照明室にいるマモルに差し入れた。「もうすぐ夏子さんが現れる」と、喉元まで出るけど言われへん。動転していたのか、お茶を忘れた。アホやからいつも何かひとつ忘れる。少し離れたところからドキドキしながら照明室のドアを見つめる。

ウチと同じように躊躇したんやろか、夏子さんは照明室に入るタイミングが遅すぎた。舞台と同じで本番になると身体が震える。気持ちはよく分かる。

——ひよつとしてウチが邪魔したんかも

照明室に入って一分も経たずにスタッフが戻ってきた。すぐ夏子さんが出てきて走り去った。マモルも出てきてしきりに左右を確認する。

——またもや夏子さんは失敗した……ひよつとして失敗するつもりやった？

コンサートが始まる。ウチはマモルがカメラを構えるすぐ後ろで守バンドの演奏を聴く。当然ピアノを弾く守君と春夜さんのバイオリンに注目する。二人は動ずることなく演奏する。春夜さんのバイオリンが守君のピアノにぴったり絡みついて聴衆を魅了してアンコールも終わって幕が下りた。どう見ても二人はペア。パンフレットのクレジットによると春夜さんは日本を代表する若手女性バイオリニストとして囑望されていた。一方、夏子さんと守君との間には溝がある。

コンサートが終わるとマモルが撮影した守バンドの写真集が売れに売れた。春夜さん、守君、それにマモル……みんな高度な技ワザを持っている。ウチは情けなくなつた。

マモルをべた褒めしたかつたけどいつの間にかいなくなつた。

——逃げた？ 言いたい愚痴ウチ、山ほどあるはずなのに。なんで？ 優しく接したのに。

受付に現れたマモルを思い出す。驚くほど明るくさわやかだったけどウチに気付いてすぐ表情を引き絞めた！ そして視線を避けた。

——ひよつとしてウチ以外に女を作つた！？

ドラマ通のウチの直感チカラは鋭い。焼き餅をやく気はないけど、ああ見えても夏子さんを仕留めた実績がある。意外とやり手なんかもしれん。

——油断したらあかん。でもエエなあ。男子は顔、関係ないもんなあ
写真集を売りながら春夜さんのことが気になつて仕方なかった。

——なんで守君は春夜さんより夏子さんを選んだ？

喧嘩が消えた時、守バンドのドラマーがふらつと現れたので、マモルに訊こうと思った春夜さんと守君の関係を尋ねてみた。

「春夜は守の許嫁イナズケや。いずれ結婚するやろな」

驚くというより無力感に陥る。美人だとか、頭がいいとか、スタイルがいいとか、一芸に秀でて女子は男子に翻弄される。ましてウチなんか何の取り柄もあらへん。

摩周湖で始まったこの物語の結末はどうなるん。傍観者でエエけど、このドラマの最終回は絶対見たい。ハッピーエンドはありえへん。少なくとも悲劇か、喜劇か、それを知りたい。

——百パーセント悲劇や。でもハッピーエンドになれへんかなあ。したら最高の喜劇になる！

*

マモルVS守、マモルVS夏子、春夜VS夏子という三大VS問題がいつどのよう^に発生して複雑に絡まったのか、知らんけど、この四角関係……ウチを入れたら五角関係！ 算数に弱いウチはどうしようもない。悩みに悩んでマモルのデートの誘いを受けた。

——懐に飛び込まんと情報が入いらへん

失恋の傷を癒やすためにウチと付き合いたいと思ってるかだけは知りたかったけど、もうどうでもエエ。春夜さんも気になるけどよくよく考えれば直接ウチに影響はない。絡みが複雑や

からVSの数を減らすことにした。

恋人になりきって根掘り葉掘り守君と夏子さんの事を聞き出すために、思い切ったサービスを考えた。まず料亭の弁当を取り寄せて粗末な弁当箱に詰め替えてウチが作ったように見せかけた。食べ物で釣る作戦や。いい線までいったけど……逃げられた。ちよつと甘くすれば男子は簡単に騙されると思つてたけど、ブスのウチには無理やつた。

仕方なくひとつのカップでフーフーと熱いお茶と一緒に飲む柔らかめの作戦にダウンしたけど、やんわりと断られた。寝たふりして作戦を練り直す。過激な誘惑を仕掛けたけど乗ってけーへん。

——ウチはこれでも女やで！

家まで送つてくれるんやから、オカンにマモルを紹介して追い詰める作戦を考えた。けど家に着くと「じゃあ」と帰ってしまった。

結局目的は達成でけへんがった。しかもウチは大損を被^{コケム}つた。オカンからも「なんで五千円もする弁当、注文したんや」と怒られた。結局、何一つ聞き出す事がでけへんがった。

——ウチを好きなんは間違いないんやけど……夏子さんを忘れられへんのかなあ

失敗原因はハッキリしている。ウチが美人やつたら簡単にキスしたはずや。ここは原点に立ち返つて考え直さんと。アホな頭で分析した。ついに原因を究明した。それはこれまでの人生で最大の発見やつた。

——これまでの付き合い方が問題やった！

追いかけると逃げる。逃げると追いかけてくる。こんなパターン、テレビドラマで何度も見たのにぜんぜん気付かへんかった。ウチは興味津々の割には追いかけてなかつた。そして……こっちの方が重要！

——ウチの奥ゆかしい性格も問題やったんや！

けどこんなエエ性格を修正するなんて、今さらでけへんし、もつたいない。

一方で厳しい現実が迫ってくる。ウチは間もなく女子ではなくオバはんになる。「大阪のお姉ちゃん」やなく「大阪のオバちゃん」という汚名を着せられる。

——今日が一番若いんや。勝負！

と思っただけど

——単なる興味本位と違うん？

目的が分からんようになって混乱する。芸能人のスクープ番組の見過ぎかもしれん。でもテレビを見るよりおもしろなってきた。

*

ウチとマモルの気が合うことは否定せーへん。だから守君モリは上町さんを通じて仕掛けて来た……テレビを見んと自分の頭で考えた。

守君のお父さんの体調が、夏子さんとの結婚をこれ以上先送りできなくなつたんかも知れん。

けど本当に愛し合っているんなら、マモルなんか無視してさっさと結婚すればエエだけの話。それも行かんところに問題があるんや。

——こっちは大迷惑や。何とかしろ！

守君がどこまでウチの想いを知ってるんか分からへんけど、同じ女でも裏切られる事があるから用心する。上町さんが味方なのか守君の手先なのか、気になったけど迷わず誘いに乗った。それに三度目の正直になる夏子さんもどこかで現れるはず。

ウチはマモルとピツタリくつつくしかない。胸は薄いけど腹は分厚い。黒馬に乗り込む。

だから守君の期待に応えるのではなく素直にマモルに接した。マモルがどう思おうと恋人のように振る舞った。そう、守君や上町さんは第三者やないけど、二人の前でウチがいかにマモルを愛しているかと言う動かぬ証拠を創ろうとした。

けど大根役者のウチにマモルは意固地コウジなままでガードを下げへん。ウチの気力が段々と低下した。何となくこの不思議な物語に飽きて来たんかも。マモルが差し伸べてくれた手にも気付かへんほどボーッとして黒馬大池の淵を歩いていると事故が起こった。足を踏み外して……何と想定外の大事件がウチに降りかかった！ ドラマの主人公が視聴者の命を救うという前代未聞の事件が……。

気が付けばウチは一気に「マモル」ファン倶楽部の会長に上り詰めた……会員はゼロやけど。さてマモルVS守、マモルVS夏子問題をどう切り抜けるか。マモルVS守問題の方がマモ

ルに与える影響は大きい。だから守君は夏子さんに説得係を押しつけた。

——守君は卑怯や！

守君との友情の決裂はウチの守備範囲外。キャッチャーのウチがセンターフライを捕れるわけがない。ウチには友情の中身の情報があれへん。付き合いが長いと言う事は歴史的な重みがある。

ブ男やけどマモルには魅力がある。砂と塩をわしづかみにして一粒も漏らさない奇妙な魔法……要はマモルはどんな事にぶち当たっても何とかなる。夏子さんはそこに魅力を感じて恋に落ちたんやろ。けど夏子さんはウチとは格が違う。柔道なら夏子さんは黒帯でウチは白帯。相撲なら夏子さんは横綱でウチは幕下。もうちよつとマシな例え方をしたいけど思いつけへん。

急に意地を覚える。しがみついてもマモルと大阪に帰りたかった。「元氣、元氣」と、明るく見せかけたけど身体が思うように動けへん。手を伸ばす事もできへん。

せやのにマモルはすべてを捨て去ると言うヤケクソ旅行に出掛けた。守君、夏子さんから逃げるのはエエけど、明るく優しいウチからも逃げた。

——こつちに来て！ こつちの水はアーマイぞ

けど反応がない。六甲駅で待ったけど来なかつた。次の日も。その次に日も。

——この不思議な物語はこれで終わり？

ウチはこの物語を六十パーセントぐらいのハッピーエンドにしたい。「優」や「良」はいら

ん。ギリチヨイの「可」でエエ。恋愛に満点なんかいらん。恋愛大学を卒業さえできればエエ。諦めへん！ 何とかせんと。

——大学に乗り込まなければ！ 六甲駅で待つなんて生ぬるかった！